

# 南春日町窯跡発掘調査の概要

—小塩窯跡群に関連する窯跡の調査—

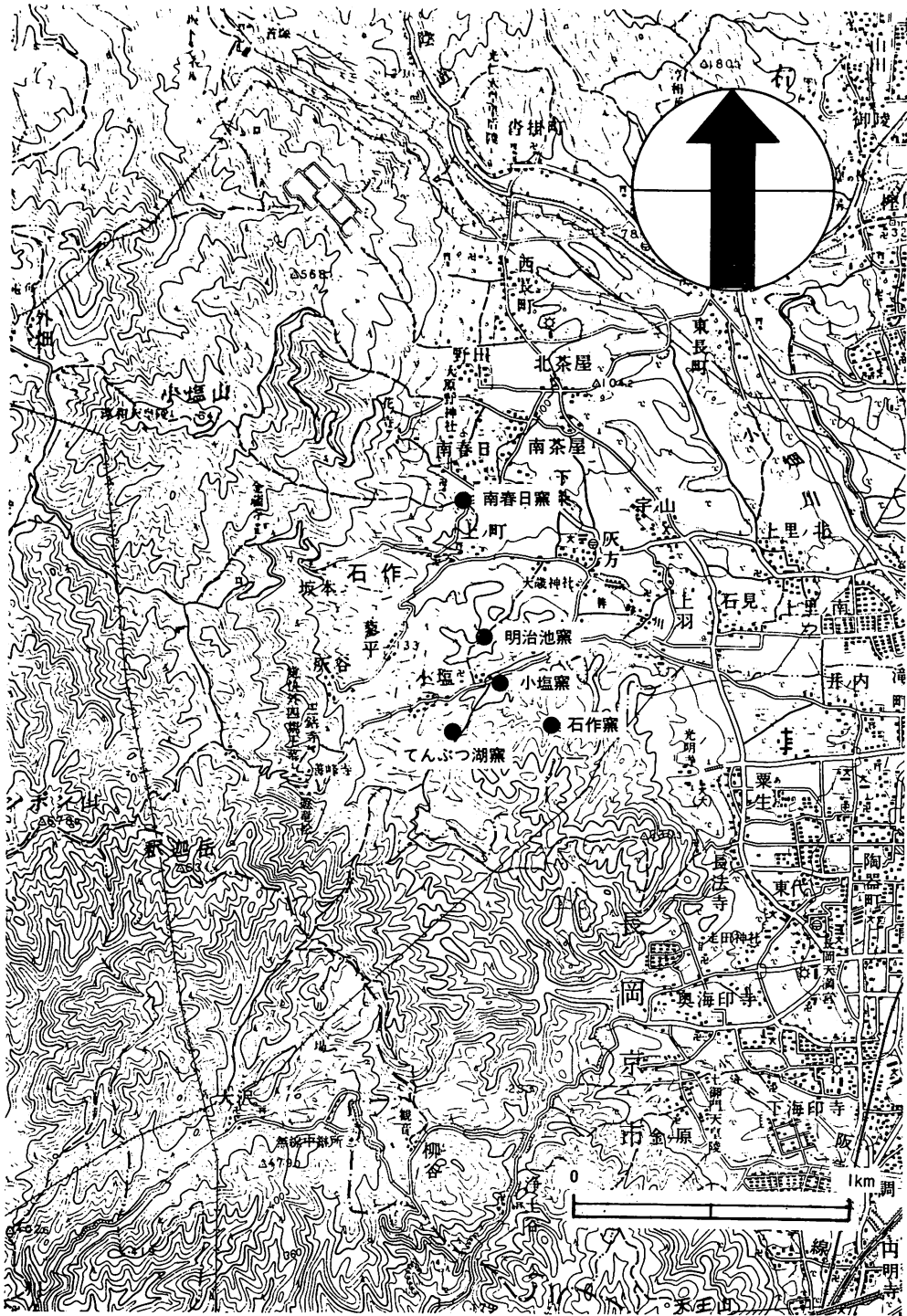
昭和54年度

京都市文化観光局  
財団法人京都市埋蔵文化財研究所

# 目 次

I	調査概要	1
	1 調査に至る経過	2
	2 調査の経過	2
II	遺構・遺物	3
III	まとめ	3
〔図・写真〕	1. 大原野付近窯跡分布図	
	2. 南春日町窯跡出土須恵器	
	3. 調査地付近地図	
	4. 調査地付近航空写真	
	調査地（調査前の状況）	
	5. 調査区 3 m グリッド割付	
	耕土・床土除去後	
	6. 調査地全景	
	断割土層堆積状況	

# I 調査概要



図・写真1 大原野付近窯跡分布図

## 1. 調査に至る経過

南春日町の竹林ではかなり以前から須恵器が採集され、窯跡の存在が推測されていた。数年前には、竹林土取りのために削られた土層の断面に焼土層があらわれ、窯の本体であることが確認された。窯跡の直下に通る道路を拡幅する際に灰原の層及び須恵器が検出された。さらに下方の斜面裾の崖面で須恵器が採集されていた。

窯体の確認された地点付近は、毎年の土取りで削られ、少なくとも1基の窯跡は全壊したと言っても良い状態である。また、灰原の層も道路によって削平され、かなりの部分が破壊された。当地は、付近で知られている小塩窯跡、石作窯跡、てんぶつ湖窯や明治池窯などとの関連性を知ってゆくうえでも重要な遺跡であるため、その性格を少しでも明らかにしておく必要があった。

今回の調査地は窯の確認された斜面の裾に位置する田である。この田では、斜面に沿った溝の掘削された折に須恵器が出土したため灰原の層が検出される可能性が高かった。

調査は土地の所有者である山口駒次郎氏の承諾を得て財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行なった。

## 2. 調査の経過

調査期間は昭和55年3月1日から同月25日までである。調査対象の田は約350㎡の面積があったが、発掘を行なったのは斜面に沿った約150㎡である。

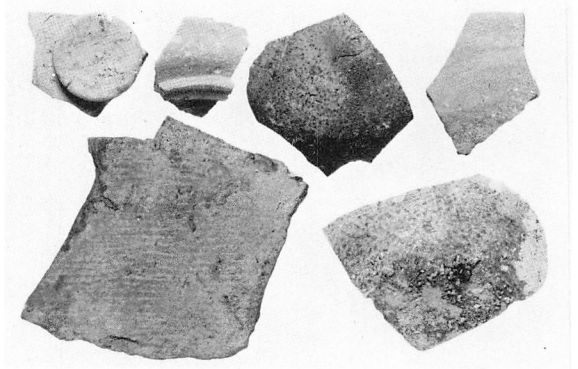
基礎作業として調査区全体に3m方眼を割りつけ、3m毎に土層確認のためのセクションを残した。また、遺物のとりあげは3mグリッド単位とした。

土層は基本的に、地山・盛土・床土・耕土の順序で堆積しており、一層ごとに除去した。床土を除去した段階で、田を造成する際に地山を削平した部分と盛土した部分の境界が検出された。また、地山は均質な粘土層であり、北東方向になだらかな傾斜をもつ。灰原とできる層は全く検出されなかった。

遺物はコンテナ2箱分出土した。床土中には土器を多く含む箇所が数箇所あったが、明治時代の貨幣も出土した。盛土層中にも須恵器の集中する部分があり、田を造成する際に、窯跡付近の土を盛ったことがわかる。

## II 遺構・遺物

遺構は全く検出されなかった。遺物はコンテナに約2箱分出土した。大部分が奈良時代の須恵器である。遺物は未整理のため、報告は後日行ないたい。



図・写真2 南春日町窯跡出土須恵器

## III まとめ

今回の調査では窯跡に直接関連する遺構、土層は検出されず、遺物を包含する土層はすべて二次的なものであることが判明した。灰原はここまで広がってはいなかったわけである。また、出土した須恵器は近辺にあった窯跡のものであろうが、現在確認されている窯あるいは灰原と同一のものであるとは必ずしも言えない。

京都市西京区大原野近辺には、小塩窯跡、石作窯跡、てんぶつ湖窯跡、明治池窯跡など平安時代から奈良時代へ溯る時期の須恵器窯が知られている。今回調査した南春日町窯跡とこれらの窯跡群との関連も今後解明してゆかなければならない。直接窯跡に関連するものではなかったが、当地の窯跡の性格を知るうえで今回の調査は何らかの手掛りを与えるものであると考える。また、大原野近辺に散在する窯跡群については、広域の分布調査によって新たに発見される可能性が非常に高くそれぞれの有機的なつながりも分布調査を基礎として解明されてゆかなければならない。



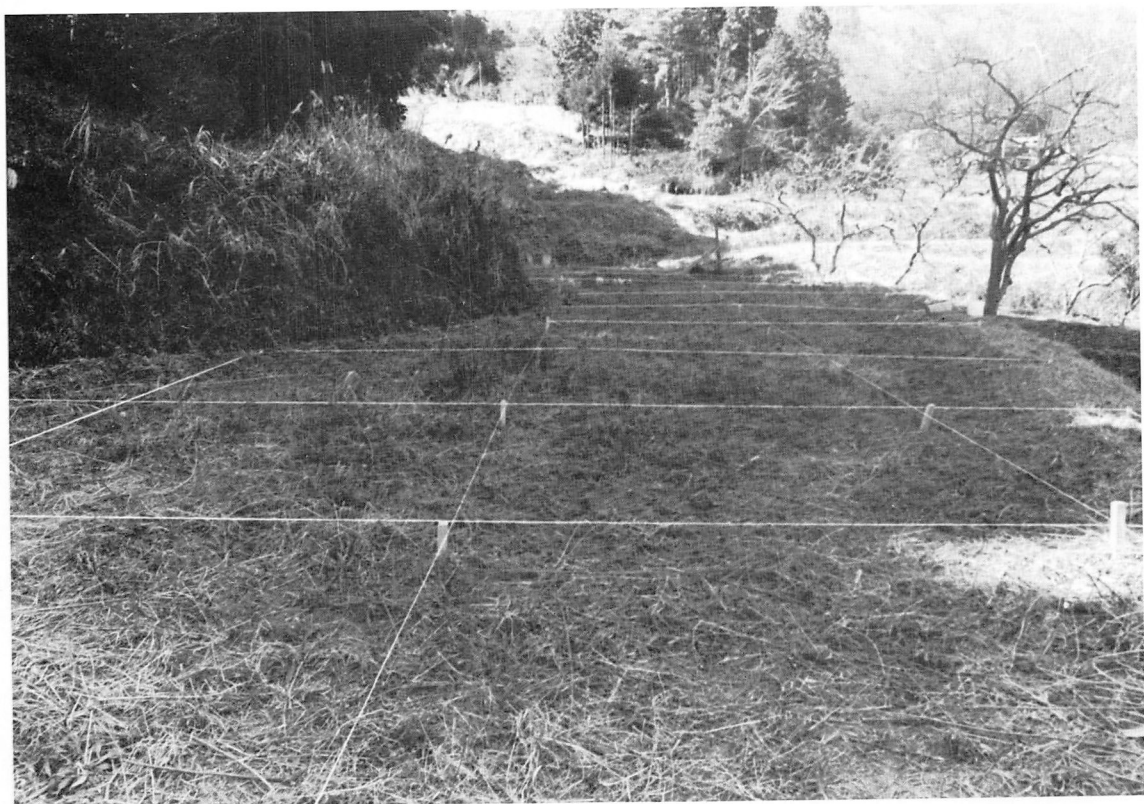
調査地付近地図



調査地付近航空写真



調査地（調査前の状況）



調査区 3 m グリッド割付



耕土・床土除去後





調査地全景



断割土層堆積状況

南春日町窯跡発掘調査の概要  
—小塩窯跡群に関連する窯跡の調査—

発行日 昭和54年3月31日

調査主体 京都市文化観光局  
発行

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
TEL (075)415-0521

印刷 真陽社